

## 疾病における顔面うっ血およびツキノワグマ徴候の出現頻度

○長崎 靖（兵監医）

### 【緒言】

ツキノワグマ徴候（月輪）とは頸部全周性の紫赤色調変色で、心不全所見といわれる。一方、顔面うっ血（顔鬱）は窒息などの外因死や一部の病死でも認められる。しかしながら、これらの違いや種々疾病での出現頻度に関する報告は見あたらない。そこで、兵庫県監察医務室における病死剖検例から顔鬱と月輪の出現頻度について調査した。

### 【対象および方法】

対象は2013年1月から2016年8月までに演者が解剖した15歳以上、仰臥位もしくは側臥位で発見された、死後3日以内で浴槽内死亡を除く病死841例。方法は、外表写真から顔鬱と月輪の有無を記録した後、死因等の情報と照合した。疾病は、1)悪性新生物、2)不整脈（虚血性心疾患による不整脈を含む）、3)心膜血腫を伴う心筋梗塞、4)その他の急性心疾患、5)慢性心疾患、6)心膜血腫を伴う大動脈疾患、7)心膜血腫を伴わない大動脈破裂、8)肺動脈血栓塞栓症、9)脳内出血、10)クモ膜下出血、11)肺炎、12)消化管疾患、13)疾病による誤嚥、14)その他の疾患に分類し、それぞれの出現頻度を調査した。顔鬱は前額、頬、下顎などに色調異常を認める場合とし、眼窩周囲のみの発赤は除外した。月輪は頸部全周性の色調異常とし、仰臥位で側頸部のみの変色など全周性でないものは除外した。

### 【結果】

841例中、顔鬱は34.0%に、月輪は27.9%に認められた。21.9%に顔鬱と月輪両方が認められ、11.7%に顔鬱のみが6.5%に月輪のみが認められた。いずれも、心臓摘出時の流出血、特に中心静脈からの流出血が多いほど陽性率が高かった。各疾患別出現頻度は表に示す。急性心疾患では、両者の出現率は50歳未満で8割前後、80歳以上では3割以下で、死後経過の進行に従って、月輪の出現頻度は顔鬱に比し低下した。

表 疾病種類別出現頻度(%)

疾病分類	例数	顔鬱	月輪
1)悪性新生物	19	0.0%	0.0%
2)不整脈	145	20.0%	17.2%
3)心膜血腫 AMI	21	38.1%	47.6%
4)急性心疾患	277	53.8%	45.8%
5)慢性心疾患	25	20.0%	16.0%
6)心膜血腫 Aortic	37	43.2%	37.8%
7)大動脈破裂	21	0.0%	4.8%
8)肺動脈塞栓	21	33.3%	33.3%
9)脳内出血	19	38.5%	30.8%
10)クモ膜下出血	22	72.7%	50.0%
11)肺炎	75	10.7%	4.0%
12)消化器疾患	74	16.2%	14.9%
13)病的誤嚥	16	37.5%	25.0%
14)その他	49	30.6%	12.2%

### 【考察】

顔鬱も、月輪も頭頸部の静脈圧上昇が成立の主因と考えられるが、特徴には違いも認められる。顔鬱はCPAOA例や死体発見時から認められ、指圧にて消退し難い。月輪は、CPAOAなど心停止直後には認められず、数時間後に出現し、初期には指圧にて消退する。顔鬱が指圧にて消退し難いのは、カテコラミン等が関与した顕微鏡的出血が原因といわれている。月輪の成因に関する記載は発見できなかったが、上記の特徴より怒張した頸静脈から周囲の毛細血管への血液逆流による一種の死後変化で、顔面うっ血を伴った縊頸や絞頸で早期に索状物を除去した後、索状痕下方に出現する変色と同じ機序と考える。もちろん、両者を明確に区別することはできず、程度の差という部分もあるだろう。また、いずれの疾病でも心停止に至る過程において冠症候群あるいはカテコラミンサーージやタコツボ型心筋症などのカテコラミン過剰分泌による心不全を経過する可能性がある。従って、両所見は心停止までのメカニズムを考える上で重要と思われる。